

はじめに

本研究は、中国での学校教育改革を具体的に示す典型的な事柄である教育課程と教科書を手がかりに、中国の教育課程改革の今日的動向に学び、研究・実践の交流を重ねながら、これからの学校教育カリキュラムの在り方を探る一つの試みとして行われた。

2005年9月の黒竜江省牡丹江市立立新実験小学校での廬銀花さん（東京学芸大学大学院教育学研究科総合教育開発専攻環境教育コース・環境教育サブコース）の修士論文の比較・実証授業とともに、北京師範大学を訪れ同大学の劉英俊先生との研究交流が節目となっている。劉氏は、北京師範大学教育学院科学教育研究センターに所属し、同大学附属小学校との共同研究に熱心に取り組み、かつ理科教科書の編集（教育科学出版社『義務教育課程標準実験教科書 科学』3～6学年）にも関わっておられる実践通の研究者である。

劉氏とは、当地で初等教育における理科及び環境教育に関して以下のような研究交流の可能性を追求しようということ話を話合った。

- 1) 教科書（教育課程）の比較研究
- 2) 教科実践比較研究
- 3) 子ども・学生の自然・環境認識に関する調査研究
- 4) 研究者の学校等への「出張事業」計画への参画

帰国後に、中国を訪問調査・実証授業件等に参加したメンバーを中心に、劉氏との e-mail での意見交換も交え、当面は1)の課題の焦点をあて以下のような作業にとりかかった。

- ・ 中華人民共和国教育部の「全日制義務教育 科学（3～6年級）課程標準（実験稿）」（2001年7月 北京師範大学出版社）の翻訳
- ・ 劉氏が編集に関わっている小学校理科教科書『科学』の環境教育に関わる内容と方法の分析
- ・ 同上教科書と東京書籍『新編 あたらしい理科』との比較検討部分を各人の研究課題に即しながら決定
- ・ 分担部分の日中比較考察を文章・表をもとに、検討
- ・ 検討内容を各自が文章にまとめる

10月からの原則毎週月曜の検討会を2月まで行い、今回の報告書原稿を作成した。

今回の検討では、まず「課程標準」の全体像を捉え、教科書での環境教育に関わる鍵となる概念や教育方法に着目して検討を進め、そこでの主な鍵概念に即した項目にそって報告書を作成することとした。それらの項目は目次と各考察を参照していただきたい。

ところで、本報告書では、日本と中国の小学校理科教科書における環境教育に関する比較研究を試みている。小学校の教科書は、日本にしても中国にしても複数の教科書会社から編集・刊行されており、比較研究するには限定的に行わざるを得ない状況である。そこで本研究では、比較研究として以下のような限定や方法を用いて進めていった。

<検討対象の限定>

- ・ 小学校の理科教科書に限定する（基本的には3年生から6年生を対象とした）
- ・ 両国で教科書研究において相対的に蓄積があり、一定のシェアがある教科書を比

較検討する（人民教育出版社の『自然』『科学』や日本の他社の教科書も視野に入れたが、今回は以下の2誌に焦点化して考察することとした）

日本＝東京書籍『新編 あたらしい理科』3～6学年

中国＝教育科学出版社『義務教育課程標準実験教科書 科学』3～6学年

- ・ 中国の基本文献「科学（3～6年級 課程標準）」並びに理科教科書の原典を、研究メンバーが翻訳し、共有化して検討、考察した。
- ・ 中国の学習内容の学年配当は必ずしも「課程標準」に記述されていない。中国では、5年制と6年制の小学校もあり、劉氏並びに課程教材研究所に確認したところ学年指定が規定されていないということである。したがって、学年配当の比較検討は、対象として取り上げた教育科学出版社の配当学年と東京書籍でのものとを比較した（日本では「小学校学習指導要領理科編」で学年指定）。
- ・ 日本の教科書には、小学校学習指導要領（1998年12月改訂）を2003年12月に一部改訂したことにより、「発展的な学習」を明確に導入することとした。本研究では、その部分については、必要に応じて触れることとした。

以上の検討と考察、比較研究は、短期間でのものであり不十分な部分が多い。とりわけ、教科書に関する比較研究に関する先行研究をカバーしきれていない点や、同じ「漢字」であってもその内容や用語の背景について十分配慮しきれていないし、それらのことを含めた比較研究には必ずしもなっていない。ただ、短期間ではあったが、現職教師や長期現職研究生、大学院生や学部生の研究集団ではあるが、日中小学校理科教科書の比較研究の意味は確かにつかんだ事は確かである。不十分な点については、本報告書等へのご意見を栄養に、各人が研究・実践・考察する中で深め、今後の日中の研究・実践交流に生かしていきたい。

最後になるが、東北師範大学の劉英健先生、中国教育部課程教材研究所の唐磊、孫新先生には、現地で多くお世話になった。この場を借りて、感謝の意を記しておきたい。

2006. 3

東京学芸大学

教員養成カリキュラム開発研究センター

三石 初雄